

氏名	チャン 蒋	ヒョン 賢	スウ 淑	
学位の種類	博士（美術）			
学位記番号	博美第331号			
学位授与年月日	平成23年3月25日			
学位論文等題目	〈作品〉時間を醸すーネックレス・ブレスレット 〈論文〉時間に関するイメージの造形化（ステンレス線によるコンテンポラリージュエリー）			
論文等審査委員				
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	飯野 一朗
（論文第1副査）	東京都現代美術館			関 昭 郎
（作品第1副査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	木 戸 修
（副査）	〃	准教授	（ 〃 ）	前 田 宏 智

（論文内容の要旨）

私の母国、韓国では、子供が生まれて1年目に「トルチャンチ」（あるいは「トル」）という満1歳を祝う会を開く。その際に「トルチャビ」という儀式が行われるのだが、これはトルチャンチの祝いの膳の上に、米や金、本や筆、木綿の糸かせなどを置き、子供に選ばせる風習である。この時に子供が何を選ぶのかによって、その子の将来を占うものである。

私はこのトルチャビで、糸かせを選んだと聞いた。糸かせというのは、細い糸が無数に集まっていることから、韓国では無病長寿を意味する。特に子供が生まれてから100日目に「ペギル（百日）チャンチ」という儀式を行うのだが、この時、100日間、健康に育ったことを祝って、子供の首に木綿の糸をかけ、子供の平安と無病長寿を願い、この糸は一生大切に保管されるのである。

6年前のある日、私は教授から一本のステンレス線をもらい、これで何か制作してみるようにと言われた。そのステンレス線を手にしたとき、私は長い間忘れていた、無数の糸が巻かれた糸かせを自然に思い出したのである。

受け取ったステンレス線は、なんの表情もない、一本の金属線に過ぎなかったのだが、私はその一本の線の中に、無数の時間の蓄積と、生命感を感じた。そしてこれまで、糸が集まっている形態にひととき魅力を感じたり、線を見るときなぜか安らぎを感じたりした、私の無意識の感覚の根源を知ることができたような気がしたのである。私が健康に育つようにと願う、母の思いが込められた糸かせが、私にとって大切なお守りであり、最初に身に着けた装身具だったことに気づいたのである。

それから私は、時間や生命を象徴するものとして、線に興味を持ちはじめた。これがその後の制作の重要なコンセプトとなり、シンプルな線の美しさの中に、人びとの思いや願いが感じられるジュエリー制作を行っている。

本論文は、以下のように構成されている。

第1章の「作品制作における精神的背景」では、自身の作品制作における精神的な背景について触れながら、韓国の民族意識について考察する。第1節では、韓国の代表的な通過儀礼のうち「ペギル」と「トル」の意味と、それらがどのような形式で構成されているのかを紹介し、特に「トル」の儀式の中核を成す「トルチャビ」について論じる。また、「ペギル」と「トル」に使う衣服と食べ物、装身具などに内包されている意味を考えていく。尚、「ペギル」と「トル」の儀式、そして韓国の装身具にも多く見られる「五方色（オバンセク）」の意味と特徴についても考察し、韓国人の美意識について述べる。第2

節では、韓国の装身具について朝鮮時代を中心に簡略に紹介する。ここでは特に、糸が意匠として使用されている「ノリゲ」について説明する。ノリゲに主に使用されている意匠と、それらにどのような思いが込められてきたのかについてまとめ、装身具における象徴性について考察する。第3節では、制作のコンセプトである時間について考察していく。循環的な時間観に対する東洋的な思考と風習に表れる韓国人の時間意識などについて考察を行いながら、始まりも終わりも無い循環的なものとしての時間を自身の制作のテーマとするに至った背景について論じていく。

第2章の「制作のコンセプト」は2節から構成される。第1節では、時間についての私論を述べていく。特に父の死を通じて、筆者が循環的な時間観に関心を抱くに至った経緯について述べる。第2節では、人とジュエリーとの関係について考察する。まず、芸術を人間の営みから生まれたものとして考え、芸術がひとつの「言語」として人間の精神を伝達する手段であり、呪術的な要素が強く内包されていることを、美術史的な側面から簡略に論じる。さらにヨーロッパのセンチメンタル・ジュエリーを中心に考察を進める。ここでは、人が装身具にどんな思いを込めてきたのかを探りながら、現在のコンテンポラリージュエリーの形成の背景と理念について考えていく。

第3章の「彫金の技法から線に至るまで」では、線を使った制作を始めるに至った経緯、制作技法と制作意図について論を進める。また、線的な要素への興味について、特に、線に時間性を重ねながら制作している理由について述べ、自作品に使用したステンレス線という素材について説明していく。

第4章の「自作品の解説」では、2004年から2010年までに制作した自作品に関する詳細を記述する。第1節では、「絶えること無く流れる時間」というタイトルで、時間を感じさせるものとして、太陽・月・星をモチーフにした作品について説明する。第2節では、「時間を醸す」というタイトルで、さまざまな形態に変化し、手にとって遊ぶこともできるジュエリーについて述べる。また、制作過程で現れた、ロウづけの跡や、線をなます時に出来た色の表情などの痕跡を、時間を表現するものと考えて仕上げたことなどについても説明する。最後に、制作に使用した道具および材料を紹介し、デザインの段階から完成までの流れと提出作品について論じる。

結論では、本論での考察をふまえ、ステンレス線によるジュエリーの新しい表現の可能性と、今後の活動の展開を示す。

#### (博士論文審査結果の要旨)

本申請論文は申請者が修士課程から引き続いて、博士課程においてステンレス線によるコンテンポラリー・ジュエリーとしての表現を探究した過程を記したものである。

韓国に生まれ、育ち、同地での彫刻家としてのキャリアを持つ申請者は、日本へ留学し、工芸分野で修士課程、博士課程に学ぶ。その課題として出された一本のステンレス線をきっかけに、自己の感性の根源となった「ペギルチャンチ」と「トルチャンチ」という韓国の通過儀礼の存在に気がつき、自身の表現の拠り所となるアイデンティティを見いだす。さらに申請者は自身の父の死に直面することになるが、その回復の過程で東アジアに共通する「循環する時間感覚」に目覚め、自身の作品の中にその換喩としての意味を結びつけていく。

申請者による民族性の表現は表面的な自己のオリエンタリズム化ではなく、「時間」や「生」、「死」より抽象的な感覚として昇華したものである。そこではまた、自己の表現分野である「ジュエリー」についての、精神性と結びついた造形分野としての歴史的側面を検証することにもつながっている。

技術的には型を使って連続する形態を整合させる過程や接合部分について造形性を損なわない構造についての解決を図っている工夫、13点の提出作品における造形的な展開のほかに、現在の表現に至るまでのさまざまな素材や技術の試みについても記している。

本研究について特に評価できる点は、一貫した研究目標を定めながら、ひとつひとつの作品制作の中

に明確な実験的な課題を試みる申請者の真摯な取り組みにある。そのことが結果として、作品に自己のアイデンティティーと結びついた強い説得力を持たせ、特に提出作品12、13に見られるような新たな表現への展開を期待させる発見を生み出している。

こうした姿勢は本申請論文においても貫かれており、博士（彫金）の学位を授与するにふさわしいものと審査員一致で評価した。

#### （作品審査結果の要旨）

蔣賢淑の提出作品、ステンレス線によるコンテンポラリー・ジュエリーは直径1ミリのステンレス線で構成されている。その材料を用いて作者の求めるイメージに沿ったパーツ、同じ形であったり少しずつ変化するパーツを制作し、それを数多く組み合わせることによって線から立体へと形を立ち上げていく。

蔣賢淑の作品の特徴は、その線材の長さによるところが大きい。

たとえば提出作品1「時間を醸す - ネックレス」、2010、ステンレス・銀パイプ、250×250×60mm一であれば、おおよそ160のピースで成り立っているとして、一つのピースが直径平均6センチとしても18.8センチの長さとなり、総延長は160個×18.8cm=3008cm、つまり約30メートルの一本の線材で成り立っていることになる。横幅わずか25センチの作品が、直径1ミリ長さが約30メートルのステンレス線一本で構成されているということである。

この長さが、作品に形の変化の意外性、自在性を与え、作者の求める時間性を内包することにつながっていく。

これだけの長さの線材を用いてジュエリーとして破綻なく構成し、作品としての完成度を高め、魅力あるものとするためには、計画段階での綿密な考察と緻密な計算、制作に当たっては精緻な技術と強い精神力が必要である。また金属材料の性質を幅広く研究してその特性を生かした造形とすることも必須である。

蔣賢淑の提出作品はこれらの必要な条件を十分に満たして、且つ大変魅力的な作品となっている。

今回の制作で得られた成果や新たな発見から、今後の制作がさらに発展していく可能性もおおいに感じられ将来への期待も大きい。

以上のことから蔣賢淑の博士課程提出作品は、優れた評価に値するものと考えられる。

#### （総合審査結果の要旨）

申請者である蔣賢淑は韓国の弘益大学で彫刻を学び、2006年から本大学彫金で修士、研究生、博士と研鑽を重ね、在学中数々の公募展で入賞を果たし成果を上げてきた。研究生の頃から線材による造形を志し試行錯誤の末現在に至っている。

提出作品は直径1mmのステンレス線を用い、一貫した思考のもと造形している。人間の一生の中にある瞬間を一つのパーツとして捉え、それを連続させる事によって長い時間を表し、無限の時間の蓄積と生命感を表現している。技術的には最も基本的な線の折り曲げ加工、鑢付けを繰り返すという単純作業であるが、ステンレスの組成、全体の構成、着用性等を考えると、そこには綿密な計画があっただけで成立する作品である。最終的にまとまった作品は伸縮性に富むと同時に形も変化し、人体に自然にフィットするところから造形、ジュエリーとしての機能を兼ね備えた秀作で高く評価するものである。

申請論文は韓国のいろいろな伝統的儀式を紹介し、その中の満一歳を祝う会「トルチャビ」（祝いの膳の上に米やお金、本や筆、木綿の糸かせ等を置き、子供に選ばせる風習）から本人は糸かせを選んだ事とそれが1本のステンレス線と重なり研究テーマとなった事から始まる。そして父親の死に接し循環的

な時間観を持つようになった事、それによって流れる時間を記録する造形物を残したいと思った経緯がわかりやすく書かれている。制作の過程、形が変化する様、身に着けた時の様子等を具体的に示しており明快でまとまった論文になっている。

本研究では1本の線、それが連続する造形、論文によって作者が何を訴えたいか、その奥深さが的確に表現されている。以上の事から本申請は博士（彫金）の学位を授与するに相応しいと認め、さらには今後の展開、活躍を期待するものである。